

## 令和3年度 第2回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】 令和4年3月24日（木）

午後1時30分～午後3時

【会場】 藤枝市生涯学習センター 1階ホール

### 1 出席者

発言者：藤枝市・焼津市において様々な分野で活躍中の方  
4名（男性2名、女性2名）

### 2 発言意見

番号	分野	項目	頁
発言者1	地域振興	地域にある資源を活用した中山間地域振興	4、9
2	SDGs	庭木の里親サービス事業及び農家の再開発による自然やコミュニティの保全	6
3	産業	企業連携による商品開発と国内外への販路拡大	11、17
4	ICT	メタバースの推進と活用による産業振興	14

【川勝知事】 皆様、お忙しい中御参集賜りまして、誠にありがとうございます。この「平太さんと語ろう」は私が語るのではなくて、今最も注目されている方々をそれぞれ焼津市並びに藤枝市から選んでいただきまして、しっかりお聞きするという会で13年間続けてまいりました。その回数は70回を上回っているところでございます。今日は焼津市、藤枝市からおふたりずつお越しいただきました。

今、移動知事室をやっております。知事室は静岡県庁の東館の5階にありますが、私の仕事は人々の生活、そして仕事を支えることにありますので、それは現場にあるということで、知事室はありとあらゆる所にあるという考えで、ずっと進めてきたものでございます。通常は泊まりながらやるんですけども、昨日は日帰り、近いから帰れるということでもございましたが、焼津と藤枝を回らせていただきました。

そしてこれは、聞きっぱなしということは今まで一度もありません。私の隣にいる中部地域局長は、大井川の5市2町の全体の統括官でありまして、言わば意思決定者です。その他にも本県の意思決定者が来ておりまして、ここで私が直接にお答えできないことが間々ありますが、承ったものはきっちりとお聞きして、それを県庁できちっと整えて御質問にお答えすると、必ず回答する形でこれまでしてまいりまして、藤枝並びに焼津の発展のために尽くしたいと思っている所であります。

昨日の移動知事室では、焼津はお魚の所だと思っておりましたけれども、トマトを温泉の水を使って作っている方がいらっしゃるんですね。おいしいトマトを作っている方々の所に行きました。そのあと、伝統的なかつお節のヤマ増田商店さんに行きまして、農林水産大臣賞を取られた技術を見せていただきまして、その製品も買わせていただきました。

今、焼津は「美食のまちやいづ」ということで商工会議所を挙げてやっけていらっしゃるわけですが、静岡県下の食材は439品目あって日本一です。そしてこの中部地域はそうしたものに恵まれていて、土の物も海の幸もあるということで、美食というか、健康に良くなるようなおいしい物を提供しようと進めていらっしゃる訳ですね。その中心が舟小屋さんの方で商工会議所の女性メンバーなんです。その方が言い出されたんですね。また焼津商工会議所の会頭さんが非常に熱心でございまして、ここは焼津だけではなくて川根に至るまでお茶の文化がございまして、食文化の観光地になるということです。そうした動きを県ではガストロノミーツーリズムという、横文字で申し訳ないんですけども、世界に通ずるためにそのように言っております。ガストロノミーと

いうのは食文化の観光、それを推進しているのが焼津市です。その後、株式会社ニッセーさんに行きまして、焼津に7つの工場がありますが、そのうちの7番目の工場を見せていただきましたが、蓮華寺池公園よりも大きい工場でした。他の工場と一緒に大井川の伏流水を使って年間10億本のジュースとか缶を作っていると。みんな大井川の水を使ってるらしい。いかにこれが大切かということを感じました。

その後、藤枝の丸七製茶さんに参りました。岡部の抹茶は有名ですが、抹茶と言ってもいろいろな種類があって、私に見せていただいたのは7つの種類です。よく見ると色が違うんですね。実は味も違うと。それを煎茶という形ではなくて、ワインボトルの瓶に入れて20本ぐらい見せてくださいました。そのうちの1本を空けてくださって、みんなワイングラスに少しずつ入れていただいて乾杯したんです。ちょっと口に含むと素晴らしい香りがした訳です。今の季節にふさわしい桜餅の香りがいたしました。また、抹茶を入れたチョコレートも試食させていただいたんですが、これを中国に持っていくと全部売れるそうです。中国は13億人いますから、いくら作っても足りないと言われておられました。

今日は、蓮華寺池公園に4月9日にオープンいたします新しい建物を見せていただきました。この地域はこれから発展していくなと感じました。

藤枝は、おそらく日本の中でICTを最初に取り入れたまちです。2016年にソフトバンクと包括協定を結ばれて、ペッパーというロボットが各学校に入っていますでしょう。ICTを使った教育を先生とアシスタントの方と一緒にやっておられる現場を見せていただいたことがあります。今日は静岡産業大学の学長と、次期学長もいらっしゃいますが、静岡産業大学と藤枝市とITBookホールディングス株式会社が協定を結んで、デジタル田園都市のモデルにしていくお話を先ほどしたばかりです。ですから、ここはもう文字通り、今、岸田政権が進められているデジタル田園都市のメッカになると、ここから広がっていくだろうと。藤枝市デジタル統括監は5市2町に広がっていくとおっしゃっていました。日本がこれからデジタル田園都市を作っていく時に、この大井川の7市町がモデルになるのではないかという強い予感と期待を感じて、今日はここに立っている訳でございます。

この後、申し訳ありませんが着座させていただいて、4人の皆様方のお話をしっかり承る充実した時間にしたいと思っております。今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

【発言者1】 皆さんこんにちは。私は藤枝市の地域おこし協力隊、発言者1と申します。出身は静岡市の清水区の由比で、富士山が大好きな根っこからの静岡県民です。この夏には田子の浦から富士山頂に行って、往復してその後富士山を一周するマラソンにチャレンジする予定です。今は藤枝市の瀬戸谷、倉田という集落に定住しながら、地域の活性化に努めています。具体的には、自分の住まいの古民家を活用して中山間地域の魅力ある情報の発信や居場所づくり、住民と来訪者の交流を創出する機会を作り、関係人口の拡大を行っています。また、自然が豊かな環境資源や拠点施設を活用したマラニックというものを定期的に開催しています。藤枝市は総面積の約7割が山間部でありながら、街からのアクセスも良く、のどかな里山の原風景が私も初めて訪れた時から大好きです。その豊かな自然を堪能できるキャンプ場や陶芸センター、温泉施設や地域の交流施設の藤の瀬会館など、地域の人達がそれぞれの施設で温かく迎えてくれます。さらに、地域に伝わる伝統の古代神楽の奉納や、美しい日本の生活文化が今も引き継がれています。山で生きる地域の人達の知恵や技術を学ぶことは、私にとってもとても大きな喜びがあります。だからこそ自分の日々感じたことや経験、知恵を活かして地域に貢献したいと思い、地域の魅力ある情報の発信をしています。地域のおばあちゃん達が日常でやっている梅干しを作ることなどを教わりながら、それを文字や絵にして皆さんに伝えるという情報の発信もしています。

里山の現状として、地域の先駆者であり、山仕事をしてこられた方の高齢化により、手つかずの茶畑や山道が多くなっています。そうすると木々や植物が道を覆い、野生動物のすみかになって廃道になっているケースがよく見受けられます。と同時に登山者や、山を走るトレイルラン、アウトドアキャンプなど山を愛して興味を持って訪れてくれる方が多いことも確かです。ちなみに、藤枝市にはこのようなハイキングマップもあります。

一見、高齢化とか人手不足というと地域の課題のように思いがちなのですが、ちょっと発想を転換して、その高齢の方達だからこそ、そのおかげでおばあちゃんの知恵袋のような豊かな学びを得ることができたり、人手不足だからこそ、その余白に人が関われる、そんな風な見方もできるのかなと思っています。その瀬戸谷の奥地には大久保という集落がありまして、グラススキー場やキャンプ場があります。30年以上、地域の方々が元気に運営している場所なんですけど、その地域の人達はもう70代、80代の方達です。

その方達は原木の椎茸やお茶などで山で生きてきた人達で、そういう人達だからこそ、そのキャンプ場には温かい、温もりがにじみ出ているような、すごく安心感のある山の遊び場です。

お手元に資料がある方は見ていただくとありがたいんですけども、その大久保キャンプ場を拠点にしてマラニックというイベントを開催したりもしています。山の人の温もりと季節を感じることをテーマにマラニックをやっています。歩いたり走ったりしながら地域のおいしいものを食べたり、景色を楽しんだり、そこで出会う人との交流を楽しみます。時に歩道や山道を通って歴史に思いを馳せたりもします。まずはその地域を知るきっかけづくりということでやっております。お手元に「ゆずコロマラニック」の資料があるんですけども、瀬戸谷には「瀬戸谷コロッケ」という名物があるんですけども、期間限定でこういう「ゆずコロマラニック」をやってみたり、「鯖の麴漬けツアー」というのは、山仕事の時に地域の人が食べていた山の先人のごはんを再現して、山仕事の時に通っていた道をみんなでハイキングしようということで企画しました。そのように地域の方が主役として輝ける機会を作ることで、地域への誇りや活力の向上にもつながると思っています。

現代、スピード重視の情報社会だからこそ、時には自然界のリズムに身を委ねて、人との心が通い合う体験が欠かせないと思います。その体験こそが思い出になり、思い出が愛着になり、愛着が絆になると思います。その絆こそがこの地域へまた来たいとか、あの人にまた会いたいなという関係人口の拡大につながるのではないのでしょうか。それがまた移住促進のきっかけなどにもなるのかなと思います。

私も一人の移住者として、空き家バンクという制度により今、古民家をお借りしています。そこはみんなの集う居場所であり、地域の魅力ある情報の発信拠点として活用させていただいております。4月からは、地域の名物である「じゅるもち」という、たくさんのお餅が入った柔らかいお餅を90歳を超えるおばあちゃん達と一緒に作り、先ほど県知事のお話にもあったように、蓮華寺池公園の貿易商館、お土産の所に置かせていただくことになりました。そのようにして山と街を結ぶことをこれからもしていきたいと思っています。そして、瀬戸谷の山間部は静岡市と島田市との結び目でもあるので、山と山とを結ぶ、そんな連帯もこれからしていけるとと思っています。

そして最後に、何よりこの素晴らしい環境の中で、共にいろいろな方と関わって活動ができることに感謝しています。そしてこれからも地域の素晴らしい宝を、もうすでに

そこにある宝をよく見つめて、磨きをかけて、光輝く中山間地域にたくさんの人に遊びに来てもらいたいと思います。本日は御清聴ありがとうございました。

【発言者2】 皆さんこんにちは。私は焼津で良知樹園という造園業、お庭屋さんだったり、植木屋さんだったり、そんなお仕事をさせていただいています。祖父が植木屋さんから始まったので良知樹園という名前なんですけれども、父がその後造園業、お庭を造るお仕事をしたので、本当は今やっている仕事は造園に近いのかもしれませんが、祖父が植木屋さんから始めたので良知樹園という名前でお仕事をさせてもらっています。

そんな中で、先ほど御紹介いただいたように、私は3年ぐらい前から庭木の里親という事業をやらせてもらっています。我々は本来、緑をたくさん作ったりお手入れしたりするのがお仕事なんですけど、木をもらってもらえないとか、切ってくれないかというお話が増えてきました。そこに行くと立派なお宅があって、木は先祖代々の木なんですけれども、簡単に言うと相続だったり世代交代だったり高齢化だったりというのが背景にあるんですけれども、これをもらって何とか生かしてもらえないかという御相談を受けるようになりました。最初は、せっかくいただいたので1本ぐらい預かって帰ろうかなと思って、家の畑に植えさせてもらったりしたんですけど、社内から「社長、なるべくもらってきてくれるな」と。というのは「持ってくるのにもお金がかかるから、もらって来ないでくれ」と言われて、そのとおりでなと思って。でも僕がそこでもらわないことによってその木が切られてゴミになっていく。僕、最終の決断者みたいな嫌な役だなと思って、何とかこの木を生かせる方法がないだろうかといういろいろ考えるようになりました。

そこで、去年の年末に「ツリーズ」というマッチングサイトを作らせてもらいました。これは静岡県の産業振興財団さんと静岡焼津信用金庫さんのお力を多分に借りて、こういうサイトを作ることができたんですけれども、我々みたいな零細企業がそういうことをする時に助けていただいたのはすごく大きかったなと思っています。これはどんなものかと言うと、簡単に言うと皆さん御存知かわかりませんが、いわゆる植木のメルカリなんですよ。今、県内は私が直接やってることが多いんですけど、実は植木は移植の時期があって、簡単に言うと、冬場は植木は冬眠、寝ている訳なんですけど、そうすると1月から5月ぐらいまでの寝ている間に移植手術をしてあげないと枯れちゃう訳ですよ。なので実はこの5カ月間で木を動かさなきゃいけないんですけども、

正直今、私たちは皆さんから助けてほしいという木を、実際は全部に行き届かない状況です。皆さんは解体工事だとかいろいろな事情があって、急務な所から対応していくんですけれども、実際は間に合わない状態です。マッチングサイトを立ち上げたことによって、実は全国でそういう状況になった訳なんです。イメージとしては、例えば東京でいらぬよという木があって、愛知県の方が欲しいよと言ったら、東京の造園屋さんトラックに載せてもらって、愛知県の造園屋さんで受け取ってもらって植えてもらうことができるサイトを作ったということです。先ほど言ったように、相続というのは、お父さんが亡くなると、子供たちが3人いると3年以内に財産を3つに分けなきゃいけない。そうすると代々住んできたお家なりお庭を現金化して3分割しなければいけない状況になります。そうすると、ずっと見てきた植木をまず切らなきゃいけないことになって御相談をいただくということです。

実は引き取ってほしいお客さんはたくさんいるんですけれども、今度はもらってくれるお客さんを探すのはすごく大変なんじゃないかなということになるんですが、実は今までの実績からすると、カフェに大きい木が入ったり、環境問題を扱っているような工場を緑化したいとか、これも面白かったんですが、運送会社の社長さんの御実家を解体することになって、たまたまその社長さんが新しく静岡市に大きな工場をつくると。そこで僕が提案したのは、社長さんが育ったお家のお庭の材料を使って新しい工場の緑化に使ったら、何となく実家に会社があるような、倉庫があるような、そんなことができるんじゃないですかと言って、今まさに今日も工事をしています。あとは、あるお茶屋さんの倉庫の場合は、その土地を購入したときに、江戸時代からある本当に古い雑草地とか大きい木があって、会長さんから江戸時代からの木だからお祓いしてからやれよということで、宮司を呼んで銀行さんと社長さんと3人で木のお祓いをさせてもらいました。宮司をお見送りして、3人の一致した意見は、やっぱりこの木を残そうということになりました。やはり人って木を切ることはすごく嫌なことで、木に頭を下げる機会はあまりないんですけれども、何となく木から「お前ら僕を切る気じゃないだろうな」と言われたような気がして。結局、きれいに手入れをして残すという結果になったりと、いろいろな経験をさせてもらっています。

実はこれをやることによるもう1つのいいことは、造園業は春から年末ぐらいまでは植木が成長しますので、皆さんからお手入れしてくださいと言われて、すごく忙しくて、まだ来てくれないのって怒られることがほとんどなんです。それはなぜかと言うと、冬

は植木が寝てしまいますので、冬の仕事はなくなっちゃうんですね。なので造園屋さんには職人さんを大勢抱えられないので、夏は怒られて冬は暇になっちゃうということなんです。けれども先ほど言ったように、移植の仕事は冬場しかできませんので、それによって造園さんは夏も冬もお仕事があると。それによって職人さんを増やせば、夏のオーダーにも応えていけるということになります。造園業界について少し、僕は造園屋さんの職人さんの地位はこれから上がるんだよと若い子たちに言うんですけども、彼らの評価を上げることができると思っています。

これから私が夢というかやりたいことは、実は結構多いのが、昔大きな農家さんだったお家が、息子さんたちがみんな東京とかに出てしまっ、お父さん、お母さんが大きな農家に住んでいる、そうすると大体立派な大きなお庭があるんですけども、手入れができないんですね。今はお家やお庭の解体費用よりも土地代の方が安いと、もう二進も三進もいなくて放棄地になってしまうケースがよくあります。そこで僕が1本、2本の木を持って行ったところで、むしろ穴ぼこが空いたような辛い状況になってしまう、何とかできないかなと思って。そこで、僕はムーミン村と呼んでいるんですが、簡単に言うと農家の再開発というか、農家の潤沢な緑を生かして、大きなお家は壊ささせていただいて、その中に小さな白い、イメージとしては四角の小さな1DK、2DKぐらいのお家をポコポコと5つ、6つ、7つと畑付きで置く。農家さんはマンションかどこかに引っ越すケースが多いんですが、そうすると一番悲しいのはコミュニティーを失うことなんです。なのでその1軒に住んでいただいて、他の5軒は若い人達だったり、都心部の人だったり、そういう形で使っていただくと、緑も、そこに住んでいらっしやっった御両親のコミュニティーも残ることができる。僕は農家の再開発じゃないかと思うんですが、そんなことができたらいいなと思っています。

もうひとつは、うちの焼津市一色の辺りは、手をつけないで放棄地になっている田んぼがたくさんあります。旧ソビエトが破綻した時に国民を救ったのはダーチャという文化だった。これは日本語に直すと家庭菜園という意味だと思うんですけども、ドイツに行くとクラインガルデンだったり、イギリスがアロットメントだったり、ヨーロッパはそういう文化が根付いていて、日本もこれから自分の野菜は自分で作るという方向になるんじゃないかな。そういった時に今のような生産農業のための農地ではなくて、昔、貸農園という言葉が流行った時期がありますけれども、もっと簡単に言うと、大きな木の木陰でコーヒーでも沸かしながら、野菜を作りながら、キャンプしてバーベキューし

て、そんなことになっていくのかな。そういう時に里親の緑や農地が活用されていったらいいんじゃないかなと思います。

もうひとつは、これからの公共施設の緑化について、少し雑に言うと、公園って実は近所のいらぬ木を集めて作ったのが本当の公園なんじゃないかなと思ったりします。このペットボトルの水に静岡県のグリーンバンクと書いてありましたけれども、昔はグリーンバンクさんってもっとそんなことをやっていらっしゃったような気がします。そうすると、あそこの公園にある木は俺んちの木だよということになって、自分たちの公園になる、そんなことができるようになったらいいなというのが私の夢であります。早口でたくさんしゃべりましたけれども、本日はこういう機会をいただきまして、ありがとうございました。

【川勝知事】 感心して聞いておりました。発言者1さんのおっしゃったことを、哲学的と言いますか、理論的に支える話を発言者2さんがなされたかなというようにも聞こえますね。おふたりとも緑に関わる素晴らしいお話をいただきまして、ありがとうございました。

発言者1さんは由比のお生まれということで、由比の薩埵峠を越えれば田子の浦ですから、そこから富士山の頂上まで文字通り3,776メートルあるわけですね。それを登って、また富士山一周をするということでございますので、NHKで「走る女性」として名を馳せていらっしゃるということでございますが、素晴らしいなと。発言者1さんは瀬戸谷に行かれて、私も瀬戸谷に行って地域の方が作られている瀬戸谷コロッセをおいしくいただいたことがございましたけれども、そこを拠点にして里山の魅力を伝えると。近くは4月9日にオープンするとんがり屋根に「じゅるもち」を置くということで、これはすぐ売り切れるように県庁としても御協力をして差し上げたいと思うほどでございます。マラソンとピクニックを合わせてマラニックですね。これは新しいあなたの言葉ですか。

【発言者1】 いいえ。もともとそのような活動をしている方が、日本全国にも少数ですけれどもいらっしゃいます。

【川勝知事】 そうですか。これをきっかけに、発言者1さんが先頭ランナーになっ

てマラニックが広まるといいですね。古民家を活用して、そこに根付いている食の文化だとか、自然をどう体験するかということで、車でなくて自らの足で走って、そして疲れた時においしい物もいただくという、こういうマラソンとピクニックを兼ね合わせたこうしたことは、これからの時代の新しいスポーツの仕方として、いわゆるより高くより速くとは違う幸せなスポーツじゃないかという気がしました。

それから、発言者2さんの話は御立派と言う以外ないというか、我々の県庁の政策にそのままビンビン響いてくるようなお話でございます。お祖父様が植木屋さん、お父上が造園屋さん、両方合わせて樹園ということですね。木を切ってその土地を更地にする、その切ることに對して躊躇された。それを何とか助けてほしいという声が聞こえてくるから、それを自分の所に植えられないならマッチングして必要な所に移していこうと。そういうことをやっておられるうちに、農家の再開発ということで、農家は通常、最低でも一反、数反を持っていますよね。一反は300坪ですから相当広いですよ。そうした所に畑があり、田んぼがあり、そして家があると。そこに大きな土地はいらないから5つぐらいの2DKぐらいの家を作って、そしてアロットメントと言いますか、ダーチャとも言われましたけれども、日本語では何て言いますかね、畑付きの家ですね。いわゆる庭付きの家というよりも畑付きの家ですよ。そこにもともとあった木を生かしていくと。それから、社長さんがどこかで工場を作る時に、その社長の家が解体されるとすれば庭の木を工場に持って行くと。ですから工場もまた建物と庭が一体になっている訳ですね。庭屋一如と言って庭と建物、家屋が一如にして1つになっている。家庭もそうですよね。日本は家と庭が1つになって家庭と言っていますから。手入れをしている自然、これに対する愛情を木も受けているから、その受けている愛情を持っている木を切り倒すというのは残酷な仕事だと。これは昔から「草木国土悉皆成仏」と、草も木も石も何もかもみんな仏性を持って、そして成仏するという。これは日本が作り上げた仏教の思想らしいです。「天台本覚論」と言って10世紀ぐらいから連綿としてある思想らしくて、仏教用語ではそのように言います。八百万の神と言ったり、いろいろな所に神様が宿ってらっしゃると。特に木については御神木という言葉がありますから、立派な木についてははしめ縄を張ってお社を建てて、その神木を実際は祭っている。そしてお社の向こうには必ず森がありますよね。社の森があります。実はこれが神様じゃないでしょうかね。ですから、そうしたものを鎮守の森と言って大事にしてきた。そういう思想と発言者2さんがおっしゃっていることは同じですね。ですから発言者2さんが実

体験に基づいて言われていることは、日本が大事にしてきた自然ですね。自然の中に命が宿っていて、そこに心を通わせて大切にしておあげるといふ、本当に優しい人だなど。こういう人が焼津にいるのは焼津の財産だなどと思いました。

そして、先ほどデジタル田園都市と言いましたが、田園都市というのは訳語で、ガーデンシティの訳なんですね。もともとガーデンというのは人間が手を入れた自然のことですから、手入れしている山もフォレストガーデンですね。手入れがされていないと、自然も本当に傷んでしまう訳ですね。そういう意味では、手入れをして差し上げるといふお考えが、3代目のあなた、家光ですね、あなたで絶えることはないと思いますね。

静岡県は今、2年続けて移住希望地ランキング日本一です。山梨県は転入超過になったんですね。山梨と静岡でふじのくにと総称しています。今、東京の多くの方達が自然のない中で、コロナで4,000人以上亡くなっているんですね。累計で120万人近い方たちが感染していて、100万人を超えているのはそこだけです。ですから、密を避けるためにこういう所に行きたい、それができるのが静岡県です。川根から焼津に至るまで大井川の流域は本当に緑したたるガーデンですよ。ガーデンシティの名がそのまま当てはまりそうな気がいたしますけれども、どういう考えでやるかといった時、それを発言者2さんが今御自身の事例で言われたんじゃないかということです。これを広めましょう。これは知られるに値すると、何か講演でもしてもらった方がいいと思いますね、忙しくない時に。しかも本当に賢いと思ったのは、春から秋にかけてはお忙しい、しかし晩秋から春になるまでは造園や植木の仕事が暇になる、その時にこれができるという話ですから、頭がいいですね。食べている物がいいからじゃないかなと。またよく世話をされているから、世話をしている樹木から知恵をいただかれているんじゃないかとさえた次第でございます。おふたりのお話、どうもありがとうございました。

**【発言者3】** 皆さんこんにちは。御紹介にあずかりました株式会社あまる齋藤商店の発言者3と申します。本日はよろしく願いいたします。まず簡単に自己紹介ですけれども、生まれも育ちも実家も焼津市で育ってきまして、高校は焼津水産高校を卒業しております。栽培漁業科で鰻班という班に入って鰻をさばくことをやっていたので、鯖屋さんに嫁いだ後も魚に触ることはそんなに苦ではなかったかなという所があり、後にながって良かったとも思っております。社長と結婚してあまる齋藤商店に嫁いできました。娘二人を保育園に預けられるようになってから会社に入りまして、26歳で現在の

社長、3代目に代が替わりまして、それ以来、夫婦二人三脚で奮闘してきています。

あまる齋藤商店ですが、創業昭和25年、昭和34年に3代目の社長の祖父が会社を設立して、創業70年余りの鯖の専門店、加工メーカーです。設立時は焼津市東小川に工場があったんですけども、当時の建物ということでコンクリート製の冷凍庫で、水を含んで今にも崩れ落ちそうだったり、耐震のこともありました。建物の老朽化が進んで、平成26年、2014年に焼津市の大井川地区、今は焼津市利右衛門ですが、工場を移転いたしました。当社の仕事ですが、塩鯖を主に作っております。塩鯖と言っても、スーパーで見られる塩鯖や一般的に聞く塩鯖は、三枚おろしになった頭のついていない塩味になった鯖をイメージされると思いますが、青切りと言いまして、頭を残して背中側から切り開きまして、内臓を取って塩をふって冷凍にして出荷しております、1本の鯖を使った塩鯖を加工しています。こちらは主に京都で関西方面の市場さんに出荷しています。京都では料亭やお寿司屋さんで鯖寿司やしめ鯖等を使っていると思います。何で焼津で鯖なのとよく言われるんですけども、昭和の創業時代は焼津港、小川港で鯖がたくさん水揚げされた経緯がありまして、塩鯖の加工が一時に行われていたようなんですね。鯖の工場自体も当時は100軒以上連なっていたんですけども、今は塩鯖屋と言われる会社はもう4軒しか残っていません。

全国に誇れる魚のまち焼津ですので、加工技術が結構生み出されているので、当社も塩鯖加工は、切り方が独特で伝統製法という形で、切り方と塩の振り方、味付けと気をつけながら日々奮闘してやっています。商品は工場直売もやっています。鯖の糍漬けですとか、鯖の西京味噌漬け、しめ鯖。しめ鯖は解凍してすぐ食べられる状態の物です。こちら創業以来変わらぬ味で作らせてもらっています。鯖の糍漬けはかなり人気が高い商品です。鯖の糍漬けは静岡県内の名物なんですかね。御存知でしょうか。私の方もそこまで詳しくはわからないんですけども、東京の方や県外の方に聞きますと、こちらでは見ないよ、売ってないよと言うんですね。静岡ではよく見かけるし、給食でも出るぐらい有名なんですけれども、県外に行くと見られない商品らしいです。小さい頃からこの米粒みたいなのが付いた鯖って美味しいよねって食べていたので、皆さんも御存知だと思うんですけども、焼津、静岡県が発祥と言ったら嬉しい商品だと思います。あとは日本三大珍味のからすみも、うちの工場加工しております。手を出しにくい商品ですので、皆さんにもよく知っていただきたいし、味を見てもらいたいということで、小さくスライスしたものを工場販売したり、マルシェやイベント、催事等でも販売し

ています。あとは工場を移転してから作り出したのが鯖寿司ですね。当時は昔の工場では鯖寿司とかしめ鯖は作っていませんでしたが、工場を移転した後にクリーンルームというものを作ったので、そちらで鯖寿司を作っています。こちらは1キロ以上ある鯖1本を使って作っているのですが、本当に身が厚くておいしい商品です。脂のりがよくて、製法的にも旨味が逃げ出さないように塩水処理する時に氷を気化した塩水に浸ける製法で作っているのですが、本当に旨味がぎゅっと詰まる鯖に出来上がります。

こちらを使って全ての商品を作っていくのですが、塩鯖を作る最中にB級品と言われるもの、傷ものだったり、最初から魚が折れてしまったり、骨が折れて内出血しているものがあります。塩鯖の製品としては使えないので、何かに使えないかということで、SDGsでフル活用できる形で考えまして、最初に考えついたのが先ほど紹介していただいた鯖カレーです。小さい切り身になったものを活用しているのですが、経営革新の補助金を使わせていただいて、全国で初めてのレトルトの鯖カレーを作らせていただきました。経営革新の話をしていただいて開発までできて、商品化されて、ちょっとほっとしました。切り身は日々出てくるので、他にも何か作りたいなというのがずっと頭にありました。焼津で活躍しているお店さんや人達と知り合う機会が結構ありましたので、女性の経営者の方と何かできたらいいねとずっと考えていました。なぜ女性かというと、自分も女性というのがあるんですが、焼津の水産加工会社は男性陣が多くて、横のつながりももちろん持たせていただいていたんですが、男の人が10人ぐらいいて女の人が私1人だけ、そんな感じでしたので、もう少し女の人が活躍できる場があったらいいのにとあって、ずっと女性というのが頭にあったんですね。なので商工会議所の女性会ですとか大井川商工会の女性部に入らせていただいて、女性ならではの経営の仕方とか、いろいろお話を聞かせていただいたり、学ばせていただいているところであります。

今、後ろのスクリーンに出ている商品なんですけれども、実物がこちらです。焼津さば味噌こんにゃく、こちらは去年9月に発売されました。同じ焼津で活躍されている岩崎蒟蒻店の女性経営者さんと出会いまして、知り合いではあったのですが、あまり話す機会がなかったのですが、何かしたいと話を持ちかけた時に、じゃあ何かいい商品を二人で作しましょうよと快く引き受けてくれました。昔からの伝統製法の鯖と、岩崎蒟蒻店さんも老舗でばた練りこんにゃくを作っている有名な所です。そのこんにゃくを使って何かできないかなということで、味噌煮なんですけれども、こちらのさば味噌

こんにゃくを作らせてもらいました。味噌煮は鯖が一匹入っていますとか、切り身で入っていますというのが主流なんですけれども、こちらの商品は切り身になった鯖とこんにゃくが入っていて、レトルト加工してあるので温めるだけで簡単、おいしい時短調理という形でお勧めしている商品です。開発には味噌の量だったり味だったり少し時間はかかったんですけれども、出来上がってからは早かったですね。岩崎蒟蒻店さんはパッケージも得意なので考えていただきました。それから去年の11月と12月にテレビに出させていただいて、紹介していただいたということもありまして、大変人気のある商品で、好評をいただきました。でもまだまだこれからもつながりを持っていきたいので、コロナ禍ではあるんですけれども、岩崎蒟蒻店さん経由でイベントやマルシェを御紹介させていただいて、岩崎蒟蒻店さんの隣である齋藤商店の鯖を売る形で今やらせていただいています。岩崎蒟蒻店さんがこんにゃくの詰め放題をやってるんですね。当社は鯖の詰め放題、切り身サイズの小さい鯖を袋に詰め込んでいただいて、もう鯖タワーができるぐらいまで詰め込んでいいよという形でやっているんですが、かなり好評で、これを目当てに来てくれるお客さんが増えて結構活気づいている感じではあります。

この盛り上がりをここだけで終わるのではなくて、女性の横のつながりをさらに増やしていきたいのと、焼津市内の水産加工会社とのタッグもあれば、みんな個々に強みがあるので、かなりいい商品がさらにできるんじゃないかなという所では、何か一緒に商品開発ができたらいいなと考えています。県内の開発商品を一元ブランド化したもの、今も「バイ・シズオカ」でやっていただいているとは思いますが、国内、国外への販路拡大について県政の強いリーダーシップをとってもらいたいというのと、あとは販路はすごい大事なので、県外にも何かを売る場所を作っていただけるとありがたいと思います。あと新焼津港の活用も他に何かできないかなとか、港マラソンや港まつりで使っているんですけれども、他にも何かやれることはないのか考えていて、常に何かできたらいいと思っております。まだまだ会社とともに私も発展途上なので、これからも日々勉強、奮闘して頑張っていきたいと思っている所でございます。今後ともよろしくお願いいたします。

**【発言者4】** 皆さんこんにちは。ただいま御紹介いただきました発言者4と申します。よろしくお願いたします。簡単に私の自己紹介をしますと、生まれは実は新潟の燕市でして、育ちは実は茨城の土浦、住まいは今、東京の葛飾区立石という所で、何でここ

に座っているんだろうと皆さんは今、僕のお話を聞いて思われたかもしれません。静岡県、藤枝市の方とどういった関係があるかと言いますと、私の会社のNEXT株式会社は、ITbookホールディングスというグループを束ねている上場会社がございまして、この会社にあるITBookという会社が官公庁や地方自治体のITコンサルをやっている会社です。私の会社は、先ほど御紹介がありましたけれども、ITの技術者を派遣することやシステム開発などを行っている会社です。そんな会社が、先ほど知事からも御紹介があったんですけれども、藤枝市さんは全国の中でICT、IoTの導入支援や、DXの取組がかなり進んでいる自治体さんであると僕は思っています。たまたま我々が藤枝市さんとお付き合いすることになったのが5年前ですね。中小事業者向けのICT、IoTの導入支援や、クラウドソーシングの事業をやるといったことで藤枝ICTコンソーシアムという団体を立ち上げる取組をされるお話がありまして、我々はその御支援を賜りまして今に至っている、そんな状態でございます。

今日、私達が御説明したい内容については、ICTコンソーシアムの運営に携わって藤枝市をどうやって盛り上げていくのか、活動している内容を今日は御説明したいと思っています。

今回、ここでお話ししたいのは、新たな集客の手段となるメタバースといったものです。実は藤枝市さんで2月に藤枝地域産業DXフェアがあったんですが、こちらを御案内したいなと思っています。そもそもメタバースって何ですかねという所なんですけど、私も今勉強している最中で、メタバースというのはメタという言葉とユニバースという言葉を組み合わせた造語らしいですね。オンライン上に3DCGで構成された仮想の空間があるんですね。多分、皆さんは映画を見られたことがあるかもしれませんが、「マトリックス」をイメージしていただくとおわかりになると思うんですけれども、仮想空間を指します。そしてユーザーと言われている使う側の方々がそれぞれ単独で入ってくる訳ではなくて、複数の方々が同時にその空間に入ることができて、いろいろな情報だとか、いろいろなコミュニケーションを共有できるそうです。そういったものを今回、藤枝市さんで取り組ませてもらいました。その藤枝地域産業DXフェアでやったこととしては大きく2つあります。

1つは、藤枝市並びに藤枝市内の事業者の方々による体験商談会を実施しました。参加者は事前登録者数が25名、当日御参加いただいた方が78人、計103名にこのイベントに来ていただきました。出展者の方々については、藤枝市さんはもちろんですけれど

も、藤枝ICTコンソーシアム様、静岡産業大学様、市内の企業である共立アイコム様、食の学び舎くるみキッチン様、サンロフト様、あと県外からも多数出ていただきまして、2団体9法人に今回御参加いただきました。始まる前は我々としても本当に手探りな状態で、こういった集客とイベントを作ったので、どうなのかなと思ったんですが、実際に先ほど申し上げた来場者の方と参加企業、団体様も来ましたので、想像していたよりもしっかりとやれたなど、盛況のイベントになったなと思っています。

もう1つは、新しい生活様式の1つになっていると思うんですが、皆さんも今は当たり前のように使い始めていることだと思うんですけども、いわゆるキャッシュレス、電子決済ですね。あとはクラウド上で生産管理と言われているいろいろなことをやるものがあるんですが、そのセミナーを実施いたしました。

やっていただいたセミナーの内容としては、PayPay株式会社さんの静岡拠点のスーパーバイザー様に、キャッシュレス決済だけではないペイペイの利用方法を御紹介してもらった件と、凸版印刷株式会社さんのDXデザイン事業部の部長様に、生産管理システムのセミナークラウドを御紹介してもらいました。今出ている映像は、キャッシュレスセミナーの内容でしょうか。これは凸版印刷株式会社さんの部長さんが説明されている内容ですね。今回のセミナーは、これまでとは違った視点からの内容を説明してもらったことで、参加された方々が新たな気づきを得られた機会になったというアンケートをいただいていますので、実際こういった催しをして良かったなど我々としては思っています。

以上、今メタバースはコロナ禍において、日本だけではなくて世界がものすごく注目している実用的かつ先進的な、集客をするプラットフォームです。ですので、これを使って現実の地域の産業や教育、文化と掛け合わせるオンライン型のもの、市が継続的に発信、宣伝することで、幅広い層、その地域だけではなくて日本全国、世界に向けていろいろな発信ができる形が取れます。そうすると藤枝市さんの方にもいろいろな関心を向けてもらえる動きになることと、次につながる成果も見やすくなるといった形が取れたのかなと思っています。

最後になりますが、今回、藤枝地域産業DXフェアを実施いたしましたけれども、このメタバースを使って、これまで培ってきた、リアルで行ってきた地域産業祭のノウハウと、こういったバーチャルでメタバース上でやるやり方を組み合わせることで、新たな集客方法を組み合わせることで、資産の効率性を向上させることであったりだとか、

中長期的な視点から他の自治体における競争力をつけることができるのかなと我々、今考えています。なので藤枝市さんイコールメタバース事業者の都市、これはちょっと言い過ぎかもしれませんが、そういった形を地域活性化につなげていければいいのかなと我々は思っています。今回はあくまでも体験商談会ということで、メタバース環境を使わせていただきましたけれども、実際、先日も大きな地震が東北地方でございましたが、このメタバース環境でいろいろな危機管理センターの拠点をバーチャル上で作ることも実はできます。地域の人材を確保していく採用の面で考えていくと、例えば新卒や中途採用をこのメタバース環境で行うことや、今はもうコロナ禍でECサイトで物を購入販売するのも当たり前になってきましたが、実際、このメタバース環境でもそういったことが行えます。なので、例えば県の特産物をメタバース上で見せて買ってもらって、そこに興味を持ってもらって、実際に静岡に来てもらうといった行動につなげるといった所も、様々な用途として考えられるのかなと思っています。

なのでDXの推進をどこよりも早く取り組むことは、藤枝市はもちろんなんですが、静岡県全体を盛り上げていける仕掛けになるのかなと私自身は考えています。ぜひ知事、この取り組みを静岡県全体で実施してみたいかと思いますが、大阪はいろいろと取り組まれているような動きは出ているみたいですが、実際に具体的に何をどうするといった所まで、まだ新しいことなので取り組まれていないと思われまので、ぜひお考えいただければと思っています。今日はどうもありがとうございました。

**【川勝知事】** 発言者3さんと発言者4さんの御意見は、一見関係ないようですが、それぞれ焼津から開く未来、藤枝から開く未来という意味では非常に共通しているなと思いました。発言者3さんと発言者4さんが組んだらいいなと思いました。イーコマースというのがありますし、キャッシュレスの取引ができる時代が今始まりつつあります。そうしたことで、県内35市町の中で最先端を行っているのが実は藤枝市なんです。焼津市は隣同士ですからね。そして今日は岩崎蒟蒻店の方が来ておられるんですか。

**【発言者3】** いいえ。

**【川勝知事】** そうですか、その方に私はこの知事広聴で会ったことがありますよ。素

晴らしい人ですよ。同じぐらい知っている訳です。そして、焼津は御案内のように、商工会議所の会頭さんが「美食のまちやいづ」を推進しているわけです。商工会議所もそうですし、農協も漁協もそうでしょうけれども、どちらかというところまで男性中心でしたからね。やはり美食のまちは家族の幸せとか人々の幸せに関わるものだから、男だけで考えていたらだめですよ。ですから、岩崎蒟蒻店の方、発言者3さん、そして昨日お会いした舟小屋さんの方を御存知ですか。あの人も商工会議所のメンバーではないでしょうか。

【発言者3】 商工会議所青年部です。

【川勝知事】 青年部ですか。私は会頭さんに言って、今本当に新しく始めようとしている「美食のまちやいづ」を作るためには、どうしても会頭さんだけの考え方では変えられない所があると思うんですよ。ですからそこに少数の女性陣を励ます応援部隊の応援団長になってくれないかと言ってよろしいでしょうか。じゃあ、今度会頭さんに会った時に言っておきます。彼の思い出はすごいですよ。

先ほどの鯖とこんにゃくの組み合わせ、それから鯖カレーというものを作ると、からすみはもちろん有名であります。実は私は京都で、母が大阪出身なんですけれども、あの辺はお寿司と言うと、ばら寿司と鯖寿司なんです。なぜ私が鯖寿司を好きかというのは、発言者3さんの先代から売っていただいていたおいしい鯖を食べてきたからだ。今つくづく感じておりまして、あらためて感謝を申し上げたく思います。ようやくそこに鯖寿司が、何も京都で作ることはない、こちらで作れば良いということですよ。おいしいものをこちらに来て、食べに来てもらったらよろしいんじゃないでしょうか。ですから、原材料を作り、それを製品にし、完成品にして付加価値をつけて大勢の人に楽しんでいただくと、これが美食のまちづくりになるんじゃないかと思えます。

今、新しい商品をいろいろとやってらっしゃると、「バイ・シズオカ」とおっしゃったでしょう。山梨県と連携した「バイ・ふじのくに」をやる場合とやらなかった場合で1.5倍の経済効果、つまり「バイ・ふじのくに」をやった結果は1.5倍だと。静岡産のものを静岡県民360万人で買い支えましょうよという、今まで県外に出していたのをこちらで消費しましょうという運動ですね。それが今、山梨まで広がりまして、山梨県も富士山、あちらはふじのくにの奥座敷で、こちらを表玄関ということで、あそこに80

万の人がいます。海がないんですよ。山梨県は海なし県なんですね。だから海に対する憧れがものすごく強いのですから、これを売ればいいと。そういう訳で、向こうにない物をこちらが持って行く。さらにその向こうに、山梨県の清里という所を御存知ですか。そこを越えると野辺山高原に出ます。長野県なんですよ。もう本当に一体です。長野県も海がないわけですね。向こうに新潟がありますけれども、新潟は今は冬で厳しい訳ですね。日本海側の産物と太平洋側の産物があって、その真ん中に海のない県があって、そうした所は今まで東京から物を入れていたんですけれども、直取引ができる、電子取引もできると。そして物を物流で運ぶためには中部横断自動車道って聞かれたことありますか。これもそのまま甲府盆地に行きますからね。すごく往来が簡単になりましたので、これはできるようになると思います。これはいわゆるガストロノミーリズムと先ほど言いましたような、食文化の街道になっていくだろうと思うんですよ。そしてその海の玄関口、食の都がこの焼津だと。私は、発言者3さんが偉いと思ったのは、お嫁に行かれたとのことですが、高校が初めから焼津水産高校だと、つまり中学卒業した時から、初めから自分の生きる道を決めていたわけでしょう。共水鰻というのがあがるじゃないですか。あれはもう普通の人は食べられないですよ、高級ですから。しかも全部地下水、伏流水で、栄養たっぷりです。私は工場に行って見せていただいたんですけれども、そういう淡水で育ったものも含めて海の幸を持っているのが焼津ですよ。ちょっと内陸に入れば里の幸がいっぱいありますから、こういう意味で本当に食文化の原点がこちらにあると思いますので、大いにいろいろなものを工夫していただいて、簡単に買えるものをお土産で食堂に置いておけばいいんじゃないかと。

私も、「バイ・シズオカ」、「バイ・ふじのくに」、「バイ・山の州」と言いまして、山の州というのは、静岡県、山梨県、長野県、長野県には千曲川が流れていまして、千曲川が新潟県に入ると信濃川という名前になるんですよ。そこにお生まれになったのが発言者4さんですよ。そして流れ流れて、土浦から葛飾、その葛飾からこちらに来られる、関係人口なんです。最近、関係人口という言葉がありまして、必ずしもこちらに居住してるとはしないと。だけど深い縁を持って、藤枝と御自身の働いていらっしゃる所と、あるいは住まいと関係していると。だから新潟に恩返しをするためにも、これを売ってくださいよ。「バイ・山の州」と言いますが、山の州は新潟県と長野県と山梨県と静岡県です。山の日というのが数年前にできまして、8月中旬にあります。それをきっかけに、新潟と長野と山梨と静岡が中央四県サミットをずっとやってきて、それが今、

お互いに物を買ひ合ひましょうよと。作っている物は違いますからね。中部横断自動車道ができましたので、やっぺいこうと。

物自体はトラックや何かで運ばなくてはなりませんけれども、取引あるいは情報は仮想空間で、メタバースでできるわけですよ。そして、なぜ藤枝か、なぜ発言者4さんのような最先端のことをされている方がここにいるかということ、世界のソフトバンクと全国で一番最初に包括連携協定を結んだのが藤枝市です。2016年、それがきっかけで、その頃から藤枝はICT化が進んで、先ほどおっしゃった藤枝ICTコンソーシアムも発足しました。先ほど、ITbookの方とお会いしましたが、発言者4さんは一緒にやっぺいしているわけでしょう。彼の会社と発言者4さんの会社も関係しているわけですよ。皆さん、お気づきにならないかもしれませんが、この上流には川根本町がありまして、川根本町にはゾーホージャパン株式会社という、インドに本店があるソフト系の会社があります。日本で今まで横浜にあった支店が入っているんですよ。光ファイバーが引かれていますから。ですから、川根本町の上流から焼津に至るまで、この大井川水系は水系全体を1つのまちにできると。ソフトバンクの方が藤枝市の職員、デジタル統括監になっているんですね。彼がおっしゃるのに、藤枝発で7市町1つにしたいと。静岡産業大学の方とITbookの方がそれはいい考えだと。我々も一緒に聞いていまして、やっぺいいくのがいいんじゃないかと。ですから、藤枝発でこのメタバースをやっぺい、いつでもどこでもいろいろな仕事ができるような新しい働き方改革ができます。先ほど発言者2さんがおっしゃったような、こちらは仮想空間だけでなく、具体的に世話のできる庭、畑があっぺい、食べるものに困らないと。失職して、マンションに住んで、自分のマンションでも管理費を払わなくてははいけませんし、しかも外に食べ物を買ひに行かなくてはならない。食べるものが周りにないんですよ。それが畑付きの住まいだとできるでしょう。そしてここは様々な食材を付加価値を付けて作っぺいしている人もいらっぺいやるから、これは新しい時代の幸福を作る仕事になるんじゃないかと。

ですから私は冒頭で申しましたように、発言者3さんのように直に魚を扱ひ、あるいはこんにやくを扱ひているような方が組み合わせをして商品を作り、こうしたものを人々を幸福にするためにどのように情報発信したらいいかという時に、これはもう困った時の発言者4さんということになって、全部発言者4さんがそれを引き受けて、その代わりに時々鯖をご馳走になったりされればいいんじゃないかと。鯖寿司を食べたことがありますか。からすみはどうですか。新潟で育った人が知らないということがありま

す。ですから、そういう知らない人がたくさん、今の日本の中にいらっしゃるということです。自信を持って旦那様と働きかけて、女性パワーで商工会議所のような所から始めていただいて、男女の区別をするというのは良くないかもしれませんが、今の所女性の方が少ないから、そこにみんなが力を貸すのが大事だと思っております、私たちもできる限りのことをしたいと思います。

異業種というべきおふたりですけれども、実は未来を切り開いていくためには、SDGs という難しい言葉を使われましたが、地球環境を維持しながら地域社会を健全にしていくということが地球のためになるんですね。一つ一つ、どこかで具体的に始めなくてははいけません。そうした中で、新しい働き方改革が今も現実のものになって、その先端に行く技術を持っているのが発言者4さんのような人なんです。もう一步、これから食がいかに大切かということ、飲食店がいわゆるクラスターの原因になって、これまで厳しい状況で来られました。ですから、いかに食べるのが幸福につながるかをみんな知った訳ですね。そして2020年、2021年とこの両年にかけて静岡県が移住希望地ランキング日本一なんです。20代から70代以上の全ての世代に渡りまして人気があります。そういう新しい潮流が生まれています。ぜひ自信を持って、また新しい社会を切り開いていくんだという使命感も持って、仲間を作って、くじけないで働いていただきたいと思った次第でございます。ありがとうございました。